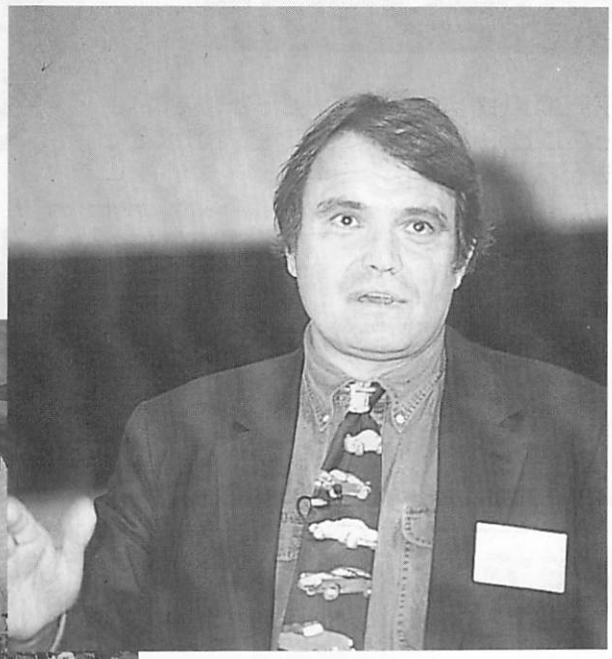
FAME Report

京都ノゾキ見トピックス

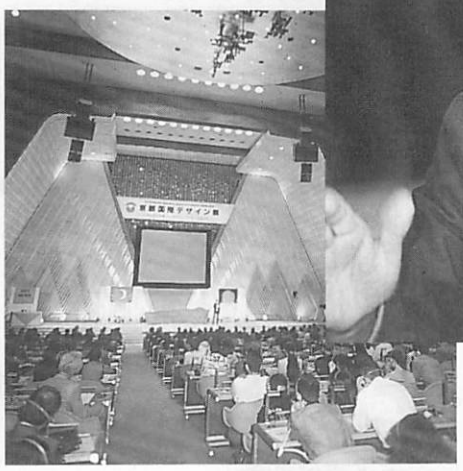
取材・文／モックン・カズロー　写真／内藤貞保

ベネトンの伝導者、あのO・トスカーニ氏も入洛。

白熱した「京都国際デザイン祭」。



「広告が訴求する嘘の天国が許せない」とO・トスカーニ氏の弁。



会場に若い世代の面々が少なかったことが、いささか残念でもあった。

柔和なお顔の立木義浩氏。

「デザインはモダニズムが捨ててきたもの、風土性をもっと取り入れるべき」とラピートの若林広幸氏。

「目まぐるしく移りゆく情報化社会に於いて最早、デザインは業種や分野でカテゴライズすることは困難。全てのものをそれとして認めぬかぎり新しい明日のデザインは生まれてこない」。

10月23日から3日間、国立京都国際会館にて行なわれた京都デザイン関連団体協議会（全12団体）主催の「京都国際デザイン祭」は、京都デザイン協会に所属する嶋高広氏のこんな熱いメッセージから幕を開けた。世界初エンターテイメントシンポジウムと揚げられたサブタイトルを見て判るように、今回の見どころは何といっても、講演者の顔ぶれ、“パリと京都”を語るピエール・カルダン氏にフランソワーズ・モレシャン氏、アジアの時代を語るデビッド・R・ブラウン氏や立木義浩氏と満場の出席者は片時も同時通訳が流れるヘッドホーンを外せなかった様子。特に印象に残ったのは初日のゲスト。現代社会を挑発し続けるデザイナー”として招かれた、ベネトンの広報責任者オリビエロ・トスカーニ氏の講演。氏曰く、「商品自体がすぐコピーされ蔓延する時代、その商品を差別化するのに今一番大切なのは、イメージをデザインすること。イメージそのものが製品になりうる。つまりそれが確立されれば、ブランドという記号は商品を意味するのではなくイメージを意味するようになる」と語った。そして「広告は消費を訴求する為だけのものでなくもっと知的にコミュニケーションできるもの。社会の状況に対して今何を考えなければならないのかをテーマに、我々は政治や宗教、SEXや生命をイメージし人々に伝達した。イメージが真実とされる時代に突入した」と。会場からは「広告しかメッセージは表現できないのか。それによって企業の間違ったイメージを伝達しないか」や「批判が恐くなかったですか」などの愚問が出たものの、1200年の文化を継承しさまざまな文化を生み出してきた地京都に何らかの啓示を与えるかのようなイベントではなかったろうか。

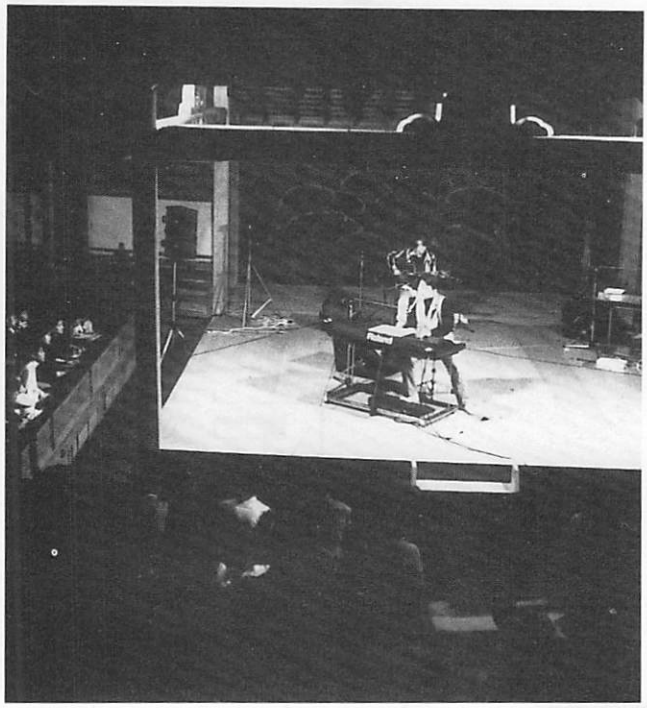
FAME Report

京都ノゾキ見トピックス

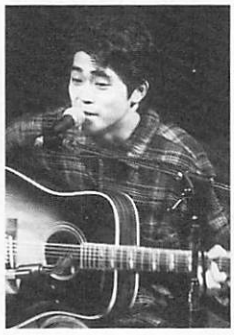
取材・文／木村紀子　写真／内藤貞保

京都の冬を彩る、恋人達のためのロマンチックな一夜。

会場となったのは金剛能楽堂。アーティスト達の歌声が木造の場内に柔らかく響き、普通のコンサート会場よりも温かい雰囲気に包まれた。



明和電気



福岡益

鈴木哲彦

片桐麻美

MIYUKI

それは、街や人の心もそろそろ冬支度を始めた11月。恋人同志には互いに握りあう手のぬくもりが嬉しい季節であり、独り者には寒さが一段と身にしみる（？）この季節。京都で、恋人達に贈る温かい一夜が幕を開けた。建都1200年協会が主催し、ソニーミュージック、αステイション、そしてクラブフェイムにより行なわれたこのイベントは、題して『SOUND ART 94～恋人達のために贈る夜』（200組400名ご招待のため選に洩れた人も数多かったようで、ごめんなさい）。さて、恋人達の夜とは何ぞや？と期待に胸をはずませて人々が集まったのは、中京区にある金剛能楽堂。しんとした静かな空気と荘厳なおもむきを漂わせるこんな場所、普段あまり来る機会がない人も多いせいか、会場内には期待のざわめきが起こる。この夜、恋人達に贈られたプレゼントとは、恋を取り巻く小さなドラマと映像で綴るロマンチックな空間。そしてそれに続く5組のアーティスト達の歌とパフォーマンスであった。キュートな歌声とルックスで、女の子の「あるあるある！」を歌うMIYUKI、爽やかな持ち味でイマドキの男性のハートを伝える福岡益と鈴木哲彦、そして女心の微妙な移ろいを切なく綴る片桐麻美、がそれぞれの世界を繰り広げ、観客のタメ息と拍手を誘った。また彼らの歌をはさんで、その独特なパフォーマンスが評判を呼んでいる明和電気が登場。彼ら自身の製作によるミョ～な楽器の演奏を披露し、落ちた照明に洒落た映像、そしてゲストの歌で恋一色に染まっていた場内を、一気に大爆笑へと持っていく一幕も。他ではちょっと見られない、恋あり歌あり笑いありの贅沢な夜。集まった人は超ラッキー、そして今回来られなかった人も、またあるかもしれない2回目に、是非期待していてほしい。